
HUNTER × HUNTER 思慮深きハンター

桜川リマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HUNTER×HUNTER 思慮深きハンター

【Nコード】

N2331Y

【作者名】

桜川リマ

【あらすじ】

憧れのビーストハンターを目指してポンズと頑張るケルト

ビーストハンターになりたいと願う理由

ポンズと共にいたいと思う願い

ゴンたちのかけがえのない仲間

クラピカという過去の親友との再会

それを胸に秘め頑張るケルトのお話です

一話 ケルト×ポンス×ハンター試験（前書き）

アニメ化（祝）二回目ってことで書いて見ました

一応何となく書いたものなので読者づけが良くなければやめてしま
います！！

これは恋愛もありますが、念に力をいれようと思ってます！！

一話 ケルト×ポンス×ハンター試験

「ねえ、ケルト。どうやって行くんだっけ？試験会場」

「自分で考えるよポンス」

「そんなこと言ってるど蜂で刺すわよ」

「わあ〜ごめんごめん！！謝るからしまっで！！確かここで定食頼むんだよ」

「合言葉は？」

「ステーキ定食で合言葉は『弱火でじっくり』」

一組の男女がさびれた定食屋に入っていく

男性の方は、ケルト

女性の方は、ポンスというようだ。

ケルトの容姿は整った顔立ちに髪の毛を後ろで結び、帽子を深くかぼってだらしない。

背はポンスよりは大きいが一般的には低いだろう

「おっさん。ステーキ定食二人前。あ〜弱火でじっくりね」

「あいよ。奥の部屋に行きな」

二人は言われた通りに奥の部屋に行く

中には既にステーキ定食が置かれていた。

中に入ると突然部屋が下がり始めた
部屋事態がエレベーターのようだ

「ぶっちゃけケルトはどこまでいけそうなの？」

「いいとこ4次試験じゃない？ポンスは？」

「私は、狙うからにはハンターになりたいけど……3次試験だと思っ。そういえば、試験中の二人で決めたルール覚えてるわよね？」

「ああ、手を取り合えるところは協力する。でも敵対することがあったら手を抜かないだろ」

二人は幼馴染というやつであり、まあまあ仲が良かった。
ぶっちゃけるとケルトはポンスのことが好きであるのだが向こうは知らない

「でもこのステーキ定食美味しいな。ポンス、ハンター試験、合格するぞ！！二人で！！」

「ええそうね。……って何であんたはそういうことをいきなりいうのよ！！もっとムードを考えなさい」

「あう……ごめん」

そんなやり取りをしていると100Fの表示でエレベーターが止まった。

外に出て受験番号をもらう

245ケルト

246 ポンズとなった。

周りにいるハンター志願者たちを見て息を呑むポンズと全く気にせず周りを見渡しているケルト

「結構遅い方が。あと何人くるかわからないけど時間あるな」

ふとケルトからあくびが漏れる

ケルトはここまでずっと試験会場を探していたため疲れが溜まっていたのだろう。

それをしてかポンズもケルトをすみに連れて行った。

「ケルト。疲れてるんだっいたら少し眠りなさい。」

「寝るっていつてもなくきつと集まったら試験にしる移動にしる長距離走はするだろうから身体固めたくないな」したに引くものはあつても、まくら無いからパス」

ケルトは周りを見渡し一瞬で判断する。

洞察力、思考力ではハンターたちの中でもトップに入るだろう

「そうなんだ。だ、だったら私の膝を使いなさい！！ここまで頑張ってきたのは見てたから。それくらいはしてあげるわよ」

「いや、そうするとポンズの足が痺れて走れなくなっちゃうよ」

顔を赤くして言うポンズだがケルトはそれを断る

「だったら私が走れなくなったら、ケルトがおぶってくれればいいでしょ！！早く使いなさい！！じゃないと薬使っても眠らせるわよ……」

「そ、それは困る。じ、じゃあ使わせてもらっぞ」

「うん」

ケルトは自分のバックから毛布をとり出して地面に敷く
その上にポンズを座らせ自分も横になった。

「あ、暇だったら俺のところから本を取り出して読んでいいぞ」

「う、うん」

ケルトはそういうと夢の世界へと旅立って行った。

「全く私が薬使いだって知ってて私の前で眠るとか笑っちゃわよ
ね」

ポンズは一人笑ってケルトのバックから本を一冊取る。

「まあ私もケルトを信用しているから同じか」

ポンズは音を立てないように本を開いた

一話 ケルト×ポンス×ハンター試験（後書き）

設定

ケルト

長い髪を後ろに一纏めにして帽子を深くかぶっている

理由は、クルタ族の生き残りのため目を隠している（コンタクトレンズも使用）クラピカとも幼少期の頃仲が良かったが7歳の時、移住してしまったため当初誰だかわからなかった。

両親は村にケルト一人置いて里帰りをしているところを蜘蛛に襲われて死ぬ

父親はクルタ二刀流の師範代であったためケルトも強い

戦い方はクルタの古来から伝わる刀（月夜と太火）二本でクルタ二刀流を使う

ポンスは移住先での幼馴染であり仲が良い

ケルトは秘かに恋心を抱いている

とても思慮深く優しく頭が良い

背の低さを嘆いている

感想や評価ください！！

自信があまりないのでいてしまうかもしれません！！

二話 ヒソカ×ト×タイケツ(前書き)

二話です。

本当に自信がありません!!

少しでも面白かったら感想ください!!

あと面白くないと思ってても感想ください!!

どっちでもいいから感想ください!!

じゃないと自信なくして消してしまいそうです……

二話 ヒソカ×ト×タイケツ

ケルトの言うように一次試験はマラソンだった
ポンスはケルトを起こして走る準備を始めた

「うんよく寝た。ありがとなポンス」

「そんなこと無いわよ。そういえばケータイ電源入れておいてよ。
あんた入れてないときのほうが多いんだから」

「入れてあるよ。離れ離れにならないようにね」

ケルトも準備を終え走り始めた

「何人くらい来たの？」

「400人と少しね。今回のマラソンがどれだけの距離かはわからないけどかなり落ちるんじゃない？」

「足は痺れてない？」

「まだ大丈夫。あとでお願いするわ。もしそうならね」

「りょーかい」

ケルトたちがいる所は受験者のうちの半分あたりだろう
近くにはスケボでついていく銀髪の子が一番目につく

「ポンス、近づいちゃダメなの奴がいるからいっておくぞ。まず、

噂になつてる奇術師ヒソカと301番。あの二人は危ない。なるべく試験管のほうに行っていたほうがいいとは思つけど、どうする?」

「そうね〜でも先頭は先頭でむさくるしそうなんだけど」

「それは大丈夫だろう。だってポンスは俺が守るし」

「っ!」

いきなり顔を赤くするポンスを不思議に思いながらも思い当たる節がないため
手を引いて前に行く

「ちょ、ちょっと!...!本当に前に行くの...っ!」

「どうかしたか?」

「足ひねった」

「.....マジ?」

「マジ」

いったん足を止めてポンスの足の状態を確認する

「ここ痛い?」

「もつちよい下」

「ここ?」

「っっ」

「ここかゝらうたらそんなに気にする必要はないと思うよ」

「でも走れない……」

「ポンズ。言っただろ走れなくなったら俺が背負うって」

そういつてケルトはポンズを背負った

「結構遅くなつたから飛ばすよ」

「っん」

ポンズが顔を赤くしながらまた答える

ケルトは、ポンズを背負っているものも他の受験者よりも速く走り先頭へ追いつこうとしていた

「うおい！！お前の体どうなってるんだよ」

飛ばして走っているといきなり取って隣から話しかけられた

相手は、上半身はだかでなりふり構わず走っているようで息が乱れている

「別に対したことじゃないですよ。こいつとは長い付き合いですがからいつくらい普通です」

「ゼエ……お前の体力すごすぎるだろ……」

「レオリオ、話す体力削れるぞ」

(まさか……いや、まさかな。あいつはもう死んだはずだ)
レオリオの隣を走る美少年に既視感を覚えるもそれはないと再び走り続ける

「あゝレオリオさん？走る時に上じゃなくて前みて走った方が楽ですよ」

ケルトは一言アドバイスしていった

「全く。敵に塩送ってどうするのよ」

「いやゝだつて、あの人のバックから医療品の匂いがしたもんだから。ああいう人にハンターになって欲しいじゃん」

「私からは毒薬の匂いがするけどね」

「ポonzの匂いは俺好きだよ」

そんな会話をしながら進むと光が見えてきた

「ゴールじゃない？」

「そうだといいいね」

光を抜けた先には大きな湿原が広がっていた

試験官の言葉によると、ここはヌメーレ湿原

別名、詐欺師の沼と呼ばれているらしい

「そいつは偽物だ!!」

という嘘つき試験官も現れたらしいが、ケルトはポonzの治療で聞
いていなかった

「またマラソンか」

「ケルト、大丈夫？疲れてない？」

「ポonzは軽いから大丈夫。っと、霧が深くなってきたな」

あたりに霧が立ち込め周りが見えなくなる。

「つつ!!ポonz、もう走れるよな？俺はちょっと用事があるから
行ってくる!!」

ポonzを下ろしたときた道を戻ろうとする

「どこ行くの？ケルト!!」

「人殺しの匂いがする。」

そう一言言ってケルトは走りだした

「人殺しってヒソカでしょう。去年と同じじゃない。去年は私が眠
らせたから大丈夫だったけど……死なないですよ。ケルト」

ポonzはケルトが人殺しに耐えられないのを知っているためただ、

ケルトが死なないことを願って走りだした

ケルトが駆けつけるとそこは、一面血の海だった

(遅かったか)

目の前には先程出会ったレオリオがヒソカに挑もうとしていると「
るだった

「レオリオさん。俺にやらせてください。人殺しは嫌いなんです」

「っざけんじゃねえ！！俺からにさせてもらおう！！」

「すみません。でも、レオリオさんじゃ勝てません。」

「やってみないとわからねえだろうが！！」

「ふふっ？僕はそっちの帽子の子からやってみたいな？」

「相手にも指名されたので俺からいかせてもらいます！！」

ケルトは、バッグから二刀一対の刀を出す

片方は刀身が真っ黒なほうを夜月

片方は刀身が真っ赤なほうを太火という名の不思議な武器だ

「ふうん 面白い武器だね？」

「今は亡き剣術で人殺しをやめさせてやる！！」

ケルトはそう言ってヒソカに向かって走りだした

途中、トランプが飛んでくるがそれを太火で薙ぎ払う

そしてヒソカに向かつて一閃

「…………浅かったか!!」

刃から伝わる感覚でヒソカの傷が浅いことを知る
ヒソカの姿を探すが霧に紛れてどこにいるかわからない
ただ、ところどころからトランプが飛んでくる

「霧が邪魔だな」

ケルトが考えているときクラピカはレオリオのもとに戻っていた

「あいつはさっきの!!…………あの太刀筋。もしかしてクルタ二刀流か!?!」

「っち。俺が先にやろうと思ってたのによお」

(そうだ。あの手があった!)

「クルタ二刀流、奥義、扇旋風!!」

両手に持った刀を扇に見立て大きく自分の周りを煽ぐようにする
すると、周りに風が起こり霧が少し晴れて行った

「見つけた!!」

「ありゃ?見つかっちゃったか?君面白いね。念もないのにそこまで強いだなんて」

(念?なんだそれ)

「もう闘う気はないよ」

そう一言言つてヒソカは霧に紛れた

「これじゃあ追えないな」

ケルトは自分の足に刺さつたトランプを抜きながら言つた
それは扇旋風を起こした時に今までにない速さで飛んできたものだった

(あの技。やはり!!もしかしてケルトか!!)

二人の戦いを見たクラピカは一つの答えに行きあたる
そして傷の手当てをしているケルトに近づいて行つた

「ケルト。お前はケルトなのか!!」

「ん?そうだけど……どこでその名前を」

「私だ!!クラピカだ!!」

「う、ウソだろ。クラピカは死んだはずだ。あの惨劇で……」

「違う!!あの惨劇では全員死んだわけではなかった!!私は、お前の父上に守られたのだ!!」

「そ、それじゃあ本当にクラピカなのか!??」

「ああ。会いたかった。お前に会って謝りたかった！！私のせいでお前の両親を死なせてしまった！！」

「そんなことはどうでもいいんだよ。友達が生きてくれていただけで俺はうれしい」

泣きながらうつたえるクラピカにケルトは優しく微笑む

「早く行こうぜ。テストの途中だ。それに今、俺とお前は敵同士なんだからな」

「あ、ああ。そうだな」

二人で走り出すと程なくして少年が一人へたり込んでいた

「ゴン！！どうしたんだ！！」

「レオリオがヒソカに挑むのを止めようと思って、戦ったんだけど負けちゃった」

「君は……ゴン君っていうのかな？傷はない？そろそろ急がないとゴールに試験官がついちゃう」

「うん。大丈夫！！ゴールまでは俺に任せて！！レオリオのつけていたコロンのおいでわかるから」

そ、それは人間じゃないだろう

と思いつつもケルトは口に出さなかった

三人でゴンの嗅覚を頼りに二次試験会上まで向かった

二話 ヒソカ×ト×タイケツ（後書き）

どうでしょうか？ゴン、クラピカ、レオリオとの出会いを入れてみました

もうちょっと深い話にしたほうがよかったかなとも思いましたがこれで行こうと思いました

次回は二次試験です

アニメではなく、あくまで原作になぞっていくのでそのところお願いします

キルアとも話せたらいいなあとかポックル出そうかなあとかいろいろ考えてます

でもでも、非常に自信がないのでいつになるかはわかりません……

感想ください！！もしだめならポイント評価だけでも！！

そして面白いと感じたらお気に入り小説に登録お願いします！！

三話 フタノ×マルヤキノ×ツクリカタ（前書き）

どうも三話です

みじかいですが読んでください！！

感想いただけると嬉しいです

自分のペースで書いていきますが

ではどうぞ〜

三話 ブタノ×マルヤキノ×ツクリカタ

二次試験会場についた俺たちはまずレオリオを探した

「どうなったのかはわからないけど俺がこんなになった時点である人がどうなったのかはわからない」

と、ケルトは思いながら探していると
銀髪の少年がよってきた

「ゴンお前すげーな！。あんなに離れててよく追いついたな」

どうやらゴン君と知り合いらしい
俺は知らないからクラピカと話そうと思うがゴン君の一言でこちらに興味を持たれてしまった

「ケルトは、ヒソカに褒められたんだよ」

褒められてないし。

っていうかゴン君がほめられたんでしょ

心の中で思うが言わないのが俺である

思ったことよりも考えたことを言うのが俺だ

「あのヒソカに！？あんたつえーんだな。」

「べつに強くないよ。ただ不意を付けただけ」

まあ技を一つ使っただけなんだけど

「俺の名前はキルア。あんたはケルトっていつのか？」

「うん。よろしく。(君血のおいがするけど人殺しかい?)」

小声で聞いてみる

「(何でわかった!! スゲーなあんた。ゴンでもわからなかったのに)」

べつにと一言答えてレオリオのいるクラブピカのところまで行く様子を見たが大丈夫そうだ

ただ記憶障害が起きていたが

もしかして見た目はああだけど強いのか?と行ってしまっ

p r r r

p r r r

いきなり携帯が鳴った

きつとポンスだろうと思いつつ出る

『ポンスゝ生きてるから大丈夫。だから泣くなよ』

『ケルト!! 生きてるの!?! な、泣いてなんかいないわよ!!』

『大きな扉の前で落ち合おう』

『わかったわ』

電話を切る

「ごめん。俺連れがいるからここで別れるわ」

「連れてって女か？」

「るっさいクラピカ」

「おい、。あんた彼女いんのかよ!!」

「いないよ。彼女じゃない幼馴染だ」

「でも好きなんですよ」

「ゴン君。何でわかるかなあ……うん。俺は好きだけど向こうはわからね」

「薬ありがとうな。え〜とケルトって言ったっけ」

「いえいえ。そちらからも持ってない薬貰えたのでこっちらもお礼を言うほうですよ」

意外とレオリオとは仲良くなれたと思う

俺は扉の前に行く

するとそこにはもうポンズがいた

「ポンズ」

「ケルト!! ってあんた怪我してるじゃない!!」

「大丈夫大丈夫。で、二次試験は？」

ここまで行ったところで扉が開き始めた

「？」

二次試験内容

それは豚の丸焼きを作ることだった

簡単だが奥が深い

まずかつたら駄目だろう

それに何よりこの草原には一種類の豚しかない

まあ俺には弱点を知っているから弱さ以外の何でもないけど

確か頭だったはず

そして、しっかりポンスにも教えておく

「わかったわ。薬で眠らしてくる」

俺はさっそくとつてきて調理を始めた

豚の丸焼きと言っても普通にそのまま焼くだけじゃだめだ

まず切れ込みを入れて血を抜く

そして強火で外を焼き

弱火で中をゆっくりと焼いていく

これで肉汁が閉じ込められるはずだ

出来上がったのを渡すと

「うっうん。おいしい合格」

簡単に合格をもらえた……

他の人も何もせず焼いて普通に合格しているし

食べれば何でもいいのか？
と想ってしまった。

三話 フタノ×マルヤキノ×ツクリカタ（後書き）

どうでしょうか？

構想は念能力までできているのでどんどんあげられると思います

お気に入り登録、感想いただけると嬉しいです

まだ、少し不安なので……

でわでわ

四話 スシ×フタ×サカナ(前書き)

なかなか早いペースで言ってます

アニメ追いつけそう、と思っていたりします

四話 スシ×ブタ×サカナ

二次試験第二回試験内容は『スシ』だった
ケルトは試験管の名前『メンチ』からメンチカツかと思ったのは内
緒だ

「ねえケルト。あんたスシって知ってる？」

「知ってる。確かジャポンの伝統料理」

作り方を教える
が

ここは川魚ばかりのためあまりスシを作るには適してない
だからここは裏技を教える

「本当は魚がいいけどここの魚は美味しくないと思うからさっきの
豚の一番脂身の乗ったおいしいところをのっけてこんな形で出すと
いいと思うよ」

スシの形を作り教えておいた

シングルハンターメンチ

この名前は俺も聞いたことがある

確か一度食べた味は忘れないとか、満足させられるのは数人しかい
ないとか

だったら、俺にはまず満足させられないだろう

料理は人並み以上にはできるがうまいわけではない

だから、ここは試験に合格するくらいの技術と味、見栄えを考えて
作るのがいいだろう

一番の難関は味だ

さっきポンスに作り方を教えてしまったため豚は使えない
だったら、ここにいる魚で一番食べられるものンを使い裏技を使う
しかないだろう

「魚だ!!」

と、誰かが大声を出したおかげで俺がとりたい魚を捕れなくなって
しまうかもしれないのは内緒だ

「魚釣りが懐かしいな」

簡単に作った釣竿を五本を手にとって湖へと行く
なぜ五本かというとすぐに壊れるかのせいもあるからである

釣り糸を垂らして五分

すぐに一匹目が釣れた

でも違う魚だ。リリース

もう3分後

二匹目。リリース

……

……

…

何匹か釣ってリリースするを繰り返しているとようやく目当ての魚
が釣れた

竿も二本ダメになったが今後使う予定はないのでいいだろう

まあ持って帰るけど

なぜあんなに早く魚が釣れていたかという薬を使っていたりする
ポンズの薬を借りて魚が寄ってくるようにしたのだ

魚一匹と竿三本を手に帰る途中で鳥の卵を一個手に入れて帰る
何人ががダメ出しを食らっていた

ポンズはなんとみんなが魚を捕りに行っている間に調理を終え合格
していた

「ポンズ余裕だった？」

「褒めてもらっちゃったわよ。私に教えなければケルトが合格して
いたのにね」

「助け合うのは当然だろ。そ、それに俺はポンズが好きなんだし（
ぼそっ）」

「なに？なんていったの？」

聞こえてなかったようだ
まあおれもこんなところで言いたくなかったからいいけど

「何でもない。俺も作るから」

「頑張りなさいよ。私だけ合格とかはいやだから」

「わかってる」

調理に取り掛かる

まず魚を切る

筋を一切なくしたのと筋ばかりのやつ、筋を少なめにしたやつ、三

尾としょうゆ漬けにして叩いたやつ
ユッケ風にした奴の五つだ

「どうぞ。」

「ん。まともなスシね。見た目は」

「どのようなスシが好みかわからなかったのでさまざまなおものを
ご用意しました。プロとは程遠いので味は保証できませんが」

「確か245番って最初の子に教えてあげた子よね」

麺とは小さくつぶやきながら食べる

「うん。まあ合格点でしょう。合格」

「ありがとうございます」

俺が合格したところで後ろにいたハゲの人間が同じようなものを出
して不合格をもらっていた

「なんでだよ！！スシって言ったら魚の切り身と米を合わせたお手
軽料理だろ」

この一言のせいで試験官が切れて僕たち以外の合格者がいなくなっ
てしまった……

どうすんだろ？

四話 スシ×フタ×サカナ（後書き）

感想ください！！

そうするとやる気が上がります

展開早すぎなどどんどん言ってください

そうするとやる気ゲージが上がります不安ゲージが下がりますので

でわでわ

五話 タマゴ×ピシヨク×サイシケン（前書き）

はい。今回は更新が早い代わりにみじかいです！

長いのは次か次の次あたりでしょうか
トリックタワーは長くやるつもりです

感想ください。返信必ずしますので
じゃないと、この小説消してしまいそうです……

99%不安で塗りつぶされた作者の心で作り上げた作品をどうぞ

五話 タマゴ×ビシヨク×サイシケン

二次試験は結局俺たち二人の合格者となった。

……俺たちもうハンターじゃね？合格なんじゃね？

でもなんか悪いようなという気持ちを抱えながら試験管のハンター教会への連絡を聞きながら待っていた

他のみんなは不合格にされて、すごいこっち睨んでいるんですけどなんかひとり楯突いて、いまブラさんに張り飛ばされたし
ていうか、メンチさんの手に持っていていらっしやるものは何でしょう
か？

すごい危険なんですけど

「ねえケルト。このまま合格だと思う？」

「過去に何回か例はあるけど……」

ジン＝フリークスがなった時とか

「今回は再テストになると思うよ。試験管の頭に血が登っちゃって
いたから」

ポンスと話しているとハンター教会の印をつけた飛行船が飛んでき
て、そこからおじいさん……ハンター内で最強と謳われるネテロ会
長が落ちてきた

なにやらメンチさんと話し合っているとメンチさんが殊勝な態度に
なって再試験をすると言い渡した

再試験会場。指差した先に見えるのは山が二つに分かれている山。

マフタツ山』だ

内容はゆで卵

俺たちは受けても受けなくてもいいらしい

まああそこだったたらこの釣竿で釣れるでしょう

普通のじゃつれないけどこれは糸が長いからさきに金具を付ければとれるはずだ

飛行船での旅もすぐ終わり、ゆで卵試験開始

ポンスは参加するらしい

俺は仮参加にした

盗り方がみんなと違うからうまくいくかはわからないからだ

釣りして5分

速いやつらはもう上がってきて卵を鍋に入れている

俺はというと……

すでに12個ゲット

という、大記録を出していた

それを見てか俺のまねをしようとする奴まで現れるし……

どうしてそんなにとれたかというと、卵の入った糸袋の先端に金具が運よくくっつき中の卵がすべてくっついてきたからである

半分は鍋に

半分は先ほどの魚と一緒にしてユツケ風にして食べた

味を一言で言うと上手い

これを食べて美食ハンターも悪くないと思ったケルトであり
色々な美食についてみんなが戻ってくるあいだ、メンチさんと仲良
くなつてポンズに鉢で追い回されたとかは美しくないので割愛する

五話 タマゴ×ピシヨク×サイシケン（後書き）

省きましたね。すみません。どうしても今日一話投稿しなかったの

前書きにも書きましたが感想ください

お願いします！！

今回はポツクル登場回です

少し長めだと思えます

でわでわ

六話 ジュケンセイ×ネン×ポツクル（前書き）

そろそろおいつくぞー

感想なくてもへこたれない

でもないと書く気になれない

六話 ジュケンセイ×ネン×ポツクル

現在ハンター試験合格者42名

俺は次の会場までの飛行船の旅をどうやって過ごそうか悩んでいた

ポنزズは女子専用ルームに行って眠ると言って立ち去ったし

ゴンくんたちのような元気もない

やっぱりクラピカと話すか？

里のことも気になるしこの剣も返さなきゃいけないかもだし
と、思っ探したら寝てるという悲しい結末

ではレオリオさんか？

レオリオさんも眠ってる

知っている人で話せそうなのは

ヒソカか

トランプで遊んでいるし無理

気分が悪くなる

血の匂いが強すぎる

結局考えているうちにお腹が空いてきたため、ご飯を食べることに
した

俺がご飯を食べているところの横では試験官たちが話している

最もあとにはわざとそこを選んだのだけど

気配を消して聞き耳を立てる

今後の試験に関する情報を得られるかもしれないからだ

「新人がいいですね今年は」

「あ、やっぱりー!? あたし245番が良いと思うのよねー、あそこであれだけの料理を考えられるんだもの。絶対美食ハンター志望だわ。二回目らしいけど」

「私は断然99番ですな。彼は良い」

「アイツきつと我俣で生意気よ。絶対B型! 一緒に住めないわ!」

「ブハラは?」

「そうだねー。僕も245番かな?新人じゃないけど」

「あの子去年はやむをえなくでしょう。可愛そうよね」

「あの子は確かにいい逸材ですな」

「あの纏。絶対念をやってるわ」

「メンチ。ここで言っちゃダメだってば」

「いいじゃない。聞いてる奴なんて……」

「いますよ。隣に245番が」

『えっ?』

一斉にこちらに注がれる視線

静かに食べていたはずなのになぜばれた!?

気配も消していたはず

それに念ってなんだ?

知らない力を俺は使えてるのか?

「あの……念ってなんですか?」

「知らないでやっていたの!? 念て言うのはねえ……」

「わぁー!! メンチダメだって教えるのは」

「そうですよ。こればかりは自分で見つけるしかありません」

なるほど。わかったぞ

念というものがある

そしてそれはハンターになるとわかるもの

俺はできているらしい

「あなたもこっちで一緒に話しましょう」

「いえ、結構です。すみませんメンチさん。俺がそちらに行く和不公平だという人もいらっしやと思うので」

「そうね……あなた何ハンター目指すの」

「俺はビーストハンターです。それが夢なので」

「夢とはどういうことですか?」

「俺の師匠と呼べる二人の人の一人がハンターだったんです。その人にくっついて旅していた時期がありまして……その人がビーストハンターだったんですよ。今はいませんが」

「そう。頑張りなさい」

「はい。でわ」

一礼してその場を後にする

目の前に帽子を俺と同じように被ったやつがいたので声をかけようと思った

「ねえ君？」

「ん？なんだ？」

「ねえ君ビーストハンター狙いでしょう」

「な、何でわかった!？」

「獣のにおいがするしその弓麻痺毒でも仕掛けてあるんじゃない？薬のにおいがする」

「すごい鼻だな。で、お前の名前は？俺はポツクル」

「この鼻は生まれつきだよ。よろしくポツクル、俺はケルトだ」

「で、何の用だ？ただ呼びかけるために声かけたのか？」

「一番ポツクル自身が知ってると思うけど？用があるのはそっちだ」

るう」

「どづゆづことだ？」

「俺が試験官と話してたのを見て何を言っていたのか聞きだそうと思っただらう。だから一緒に席を立ち獣のにおいを漂わせた。そうすれば俺が声かけると思っただらう。で、本当にそうだったと」

「すごいなケルト！大当たりだよ。あんた頭いいなあ。」

「そこまでやってくる君のほうこそすごいと思うよ。で、聞いたことは特になし」

「そうか。やっぱりな。試験管が受験生に言うわけないよなあ」

「君頭いいよね？ねえ一緒に協力しないかい？」

「どづいづこと？」

「俺たちと一緒にこれから旅をしないかってこと。もう一人いるんだけど」

「ああ、246番だろ。仲よさそうだよな。恋人？」

「幼馴染。俺の片思い」

「マジ！？」

「楽しそうな顔するな！？」

「で、どう？246番……ポンスっていうんだけど一緒に旅する予定なんだ」

「いいぜ。目的は一緒だろ」

「ああ」

握手

これで旅の仲間が手に入った

近接系の俺

中距離・遠距離のポツクル

サポートのポンス

結構いいパーティーじゃね？

そのあとは二人で毒矢についてなど話していた

3次試験が始まるまで

まあ起きてきたポンスがひどい状態なのは置いとおく

六話 ジュケンセイ×ネン×ポツクル（後書き）

感想ください！！

お願いします！！

切実な願いです

本当にお願いします！！

じゃ、じゃないと書く気力が……

お願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2331y/>

HUNTER×HUNTER 思慮深きハンター

2011年11月27日00時53分発行